
【テキスト中に現れる記号について】

《 》：ルビ

（例）この頃《ごろ》は油断がならない

|：ルビの付く文字列の始まりを特定する記号

（例）実際|今昔《こんじゃく》の感に堪えなかったね

[#]：入力者注 主に外字の説明や、傍点の位置の指定

（例）占城《チャンパ》[#ルビの「チャンパ」は底本では「チャンバ」]

「何しろこの頃《ごろ》は油断がならない。和田《わだ》さえ芸者を知っているんだから。」

藤井《ふじい》と云う弁護士は、老酒《ラオチュ》の盃《さかずき》を干《ほ》してから、大仰《おおぎょう》に一同の顔を見まわした。円卓《テエブル》のまわりを囲んでいるのは同じ学校の寄宿舎にいた、我々六人の中年者《ちゅうねんもの》である。場所は日比谷《ひびや》の陶陶亭《とうとうてい》の二階、時は六月のある雨の夜、
勿論《もちろん》藤井のこういったのは、もうそろそろ我々の顔にも、酔色《すいしょく》の見え出した時分である。

「僕はそいつを見せつけられた時には、実際|今昔《こんじゃく》の感に堪えなかったね。」

藤井は面白そうに弁じ続けた。

「医科の和田といった日には、柔道の選手で、賄征伐《まかないせいばつ》の大將で、リヴィングストンの崇拜家で、寒中《かんちゅう》一重物《ひとえもの》で通した男で、
一言《いちごん》に言えば豪傑《ごうけつ》だったじゃないか？
それが君、芸者を知っているんだ。しかも柳橋《やなぎばし》の小《こ》えんという、

「君はこの頃|河岸《かし》を変えたのかい？」

突然|横槍《よこやり》を入れたのは、飯沼《いいぬま》という銀行の支店長だった。

「河岸を変えた？
なぜ？」

「君がつれて行った時なんだろう、和田がその芸者に遇《あ》ったというのは？」

「早まっちゃいけない。誰が和田なんぞをつれて行くもんか。」

藤井は昂然《こうぜん》と眉を挙げた。

「あれは先月の幾日だったかな？
何でも月曜か火曜だったがね。久しぶりに和田と顔を合せると、浅草へ行こうというじゃないか？
浅草はあんまりぞっとしないが、親愛なる旧友のいう事だから、僕も素直に賛成してさ。
真《ま》っ昼間《びるま》六区《ろくく》へ出かけたんだ。」

「すると活動写真の中にでもい合せたのか？」

今度はわたしが先くぐりをした。

「活動写真ならばまだ好《い》いが、メリイ・ゴオ・ラウンドと来ているんだ。おまけに二人とも木馬の上へ、ちゃんと跨《またが》っていたんだからな。今考えても莫迦莫迦《ばかばか》しい次第さ。しかしそれも僕の発議《ほつぎ》じゃない。あんまり和田が乗りたがるから、おつき合いにちょいと乗って見たんだ。
だがあいつは楽じゃないぜ。野口《のぐち》のような胃弱は乗らないが好《い》い。」

「子供じゃあるまいし。木馬になんぞ乗るやつがあるもんか？」

野口という大学教授は、青黒い松花《スンホア》を頬張ったなり、蔑《さげす》むような笑い方をした。が、藤井は無頓着《むとんじゃく》に、時々和田へ目をやっては、得々《とくとく》と話を続けて行った。

「和田の乗ったのは白い木馬、僕の乗ったのは赤い木馬なんだが、楽隊と一しょにまわり出された時には、どうなる事かと思ったね。尻は躍るし、目はまわるし、振り落されないだけが見つけものなんだ。が、その中でも目についたのは、欄干《らんかん》の外《そと》の見物の間に、芸者らしい女が交《まじ》っている。色の蒼白い、目の沾《うる》んだ、どこか妙な憂鬱な、」

「それだけわかっていれば大丈夫だ。目がまわったも怪しいもんだぜ。」

飯沼はもう一度口を挟んだ。

「だからその中でもいっているじゃないか？
髪は勿論|銀杏返《いちようがえ》し、なりは薄青い縞《しま》のセルに、何か更紗《さらさ》の帯だったかと思う、とにかく花柳小説《かりゅうしょうせつ》の挿絵《さしえ》のような、楚々《そそ》たる女が立っているんだ。するとその女が、
どうしたと思う？
僕の顔をちら

りと見るなり、正に嫣然《えんぜん》と一笑《いっしょう》したんだ。おやと思ったが間《ま》に合わない。こっちは木馬に乗っているんだから、たちまち女の前は通りすぎてしまう。誰だったかなと思う時には、もうわが赤い木馬の前へ、楽隊の連中が現れている。」

我々は皆笑い出した。

「二度目もやはり同じ事さ。また女がにっこりする。と思うと見えなくなる。跡《あと》はただ前後左右に、木馬が跳《は》ねたり、馬車が躍ったり、然《しか》らずんば喇叭《らっぱ》がぶかぶかいったり、太鼓《たいこ》がどンドン鳴っているだけなんだ。僕はつらつらそう思ったね。これは人生の象徴だ。我々は皆同じように実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、掴《つか》まえない内にすれ違ってしまう。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一思いに木馬を飛び下りるが好《よ》い。」

「まさかほんとうに飛び下りはしまいな？」

からかうようにこういったのは、木村という電気会社の技師長だった。

「冗談《じょうだん》いっちゃいけない。哲学は哲学、人生は人生さ。所がそんな事を考えている内に、三度目になったと思ひ給え。その時ふと気がついて見ると、これには僕も驚いたね。あの女が笑顔《えがお》を見せていたのは、残念ながら僕にじゃない。賄征伐《まかないせいばつ》の大将、リヴィングストンの崇拜家、ETC. ETC.ドクタア和田長平《わだりょうへい》にだったんだ。」

「しかしまあ哲学通りに、飛び下りなかつただけ仕合せだったよ。」

無口な野口も冗談をいった。しかし藤井は相不変《あいかわらず》話を続けるのに熱中していた。

「和田のやつも女の前へ来ると、きつと嬉しそうに御時宜《おじぎ》をしている。それがまたこう及び腰に、白い木馬に跨《またが》ったまま、ネクタイだけ前へぶらさげてね。」

「嘘をつけ。」

和田もとうとう沈黙を破った。彼はさっきから苦笑《くしょう》をしては、老酒《ラオチュ》ばかりひっかけていたのである。

「何、嘘なんぞつくもんか。が、その時はまだ好《い》いんだ。いよいよメリイ・ゴオ・ラウンドを出たとなると、和田は僕も忘れたように、女とばかりしゃべっているじゃないか？ 女も先生先生といっている。埋《う》まらない役まわりは僕一人さ。」

「なるほど、これは珍談だな。おい、君、こうなればもう今夜の会費は、そっくり君に持って貰《もら》うぜ。」

飯沼は大きい魚翅《イウツウ》の鉢へ、銀の匙《さじ》を突きこみながら、隣にいる和田をふり返った。

「莫迦《ばか》な。あの女は友だちの囲いものなんだ。」

和田は両肘《りょうひじ》をついたまま、ぶっきらぼうにいい放った。彼の顔は見渡した所、一座の誰よりも日に焼けている。目鼻立ちも甚だ都会じみていない。その上五分刈《ごぶが》りに刈りこんだ頭は、ほとんど岩石のように丈夫そうである。彼は昔ある対校試合に、左の臂《ひじ》を挫《くじ》きながら、五人までも敵を投げた事があった。そういう往年の豪傑《ごうけつ》ぶりは、黒い背広《せびろ》に縞のズボンという、当世流行のなりはしていても、どこかにありありと残っている。

「飯沼！ 君の囲い者じゃないか？」

藤井は額越《ひたいご》しに相手を見ると、にやりと酔《よ》った人の微笑を洩《も》らした。

「そうかも知れない。」

飯沼は冷然と受け流してから、もう一度和田をふり返った。

「誰だい、その友だちというのは？」

「若槻《わかつき》という実業家だが、この中でも誰か知っていはしないか？ 慶応《けいおう》か何か卒業してから、今じゃ自分の銀行へ出ている、年配も我々と同じくらいの男だ。色の白い、優しい目をした、短い髭《ひげ》を生やしている、そうさな、まあ一言《いちごん》にいえば、風流愛すべき好男子だろう。」

「若槻峯太郎《わかつきみねたろう》、俳号《はいごう》は青蓋《せいがい》じゃないか？」

わたしは横合いから口を挟《はさ》んだ。その若槻という実業家とは、わたしもつい四五日|前《まえ》、一しょに芝居を見ていたからである。

「そうだ。青蓋《せいがい》句集というのを出している、あの男が小えんの檀那《だんな》なんだ。いや、二月《ふたつき》ほど前《まえ》までは檀那だったんだ。今じゃ全然手を切っているが、」

「へええ、じゃあの若槻という人は、」

「僕の中学時代の同窓なんだ。」

「これはいよいよ穩《おだや》かじゃない。」

藤井はまた陽気な声を出した。

「君は我々が知らない間《あいだ》に、その中学時代の同窓なるものと、花を折り柳に攀《よ》じ、」

「莫迦《ばか》をいえ。僕があの女に会ったのは、大学病院へやって来た時に、若槻にもちよいと頼まれていたから、便宜を図ってやっただけなんだ。蓄膿症《ちくのうしょう》か何かの手術だったが、」

和田は老酒《ラオチュ》をぐいとやってから、妙に考え深い目つきになった。

「しかしあの女は面白いやつだ。」

「惚《ほ》れたかね？」

木村は静かにひやかした。

「それはあるいは惚れたかも知れない。あるいはまたちっとも惚れなかったかも知れない。が、そんな事よりも話したいのは、あの女と若槻との関係なんだ。」

和田はこう前置きをしてから、いつにない雄弁《ゆうべん》を振り出した。

「僕は藤井の話した通り、この間《あいだ》偶然小えんに遇った。所が遇って話して見ると、小えんはもう二月ほど前に、若槻と別れたというじゃないか？　なぜ別れたと訊《き》いて見ても、返事らしい返事は何もしない。ただ寂しように笑いながら、もともとわたしはあの人のように、風流人《ふうりゅうじん》じゃないんですというんだ。

「僕もその時は立入っても訊《き》かず、夫《それ》なり別れてしまったんだが、つい昨日《きのう》、昨日は午《ひる》過ぎは雨が降っていたろう。あの雨の最中《さいちゅう》に若槻《わかつき》から、飯を食いに来ないかという手紙なんだ。ちょうど僕も暇だったし、早めに若槻の家へ行ってみると、先生は気の利《き》いた六畳の書齋に、相不変《あいかわらず》悠々と読書をしている。僕はこの通り野蛮人《やばんじん》だから、風流の何たるかは全然知らない。しかし若槻の書齋へはいると、芸術的とか何とかいうのは、こういう暮しだろうという気がするんだ。まず床《とこ》の間《ま》にはいつ行っても、古い懸物《かけもの》が懸っている。花も始終絶やした事はない。書物も和書の本箱のほかに、洋書の書棚も並べてある。おまけに華奢《きゃしゃ》な机の側には、三味線《しゃみせん》も時々は出してあるんだ。その上そこにいる若槻自身も、どこか当世の浮世絵《うきよえ》じみた、通人《つうじん》らしいなりをしている。昨日《きのう》も妙な着物を着ているから、それは何だねと訊《き》いて見ると、占城《チャンパ》[#ルビの「チャンパ」は底本では「チャンパ」] という物だと答えるじゃないか？　僕の友だち多しといえども、占城《チャンパ》なぞという着物を着ているものは、若槻を除いては一人もあるまい。　まずあの男の暮しぶりといえば、万事こういった調子なんだ。

「僕はその日《ひ》膳《ぜん》を前に、若槻と献酬《けんしゅう》を重ねながら、小えんとのいきさつを聞かされたんだ。小えんにはほかに男がある。それはまあ格別《かくべつ》驚かすとも好《よ》い。が、その相手は何かと思えば、浪花節語《なにわぶしかた》りの下《した》っ端《ぱ》なんだそうだ。君たちもこんな話を聞いたら、小えんの愚《ぐ》を晒《わら》わずにはいられないだろう。僕も実際その時には、苦笑《くしょう》さえ出来ないくらいだった。

「君たちは勿論知らないが、小えんは若槻に三年この方、随分尽して貰っている。若槻は小えんの母親ばかりか、妹の面倒も見てやっていた。そのまた小えん自身にも、読み書きといわず芸事《げいごと》といわず、何でも好きな事を仕込ませていた。小えんは踊《おど》りも名を取っている。長唄《ながうた》も柳橋《やなぎばし》では指折りだそうだ。そのほか発句《ほっく》も出来るというし、千蔭流《ちかげりゅう》とかの仮名《かな》も上手だという。それも皆若槻のおかげなんだ。そういう消息を知っている僕は、君たちさえ笑止《しょうし》に思う以上、呆《あき》れ返らざるを得ないじゃないか？

「若槻は僕にこういうんだ。何、あの女と別れるくらいは、別に何とも思っていない。が、わたしは出来る限り、あの女の教育に尽して来ました。どうか何事にも理解の届いた、趣味の広い女に仕立ててやりたい、そういう希望を持っていたのです。それだけに今度はがっかりしました。何も男を拵《こしら》えるのなら、浪花節語りには限らないものを。あんなに芸事には身を入れていても、根性の卑《いや》しさは直らないかと思うと、実際 | 苦々《にがにが》しい気がするのです。………

「若槻《わかつき》はまたこうもいうんだ。あの女はこの半年《はんとし》ばかり、多少ヒステリックにもなっていたのでしょう。一時はほとんど毎日のように、今日限り三味線を持たないとかいはって、子供のように泣いていました。それがまたなぜだと訊《たず》ねて見ると、わたしはあの女を好いていない、遊芸を習わせるのもそのためだなぞと、妙な理窟をいい出すのです。そんな時はわたしが何といっても、耳にかけける気色《けしき》さえありません。ただもうわたしは薄情だと、そればかり口惜《くや》しように繰返すのです。もっとも発作《ほっさ》さえすんでしまえば、いつも笑い話になるのですが、………

「若槻はまたこうもいうんだ。何でも相手の浪花節語りは、始末に終えない乱暴者だそうです。前に馴染《なじみ》だった鳥屋の女中に、男が何か出来た時には、その女中と立ち廻りの喧嘩をした上、大怪我《おおけが》をさせたというじゃありませんか？　このほかにもまだあの男には、無理心中《むりしんじゅう》をしかけた事だの、師匠《ししょう》の娘と駈落《かけお》ちをした事だの、いろいろ悪い噂《うわさ》も聞いています。そんな男に引懸《ひっか》かるというのは一体どういう量見《りょうけん》なのでしょう。………

「僕は小《こ》えんの不しだらには、呆《あき》れ返らざるを得ないと云った。しかし若槻の話を聞いている内に、だんだん僕を動かして来たのは、小えんに対する同情なんだ。なるほど若槻は檀那《だんな》としては、当世 | 稀《まれ》に見る通人かも知れない。が、あの女と別れるくらいは、何でもありませんといっているじゃないか？　たといそれは辞令《じれい》にしても、猛烈な執着《しゅうじゃく》はないに違いない。猛烈な、たとえばその浪花節語りは、女の薄情を憎む余り、大怪我をさせたという事だろう。僕は小えんの身になって見れば、上品でも冷淡な若槻よりも、下品でも猛烈な浪花節語りに、打ち込むのが自然だと考えるんだ。小えんは

諸芸を仕込ませるのも、若槻に愛のない証拠だといった。僕はこの言葉の中にも、ヒステリイばかりを見ようとはしない。小えんはやはり若槻との間《あいだ》に、ギャップのある事を知っていたんだ。

「しかし僕も小えんのために、浪花節語りと出来た事を祝福しようとは思っていない。幸福になるか不幸になるか、それはどちらともいわれないだろう。が、もし不幸になるとすれば、呪《のろ》わるべきものは男じゃない。小えんをそこに至らしめた、通人《つうじん》若槻青蓋《わかつきせいがい》だと思う。若槻はいや、当世の通人はいずれも個人として考えれば、愛すべき人間に相違あるまい。彼等は芭蕉《ばしょう》を理解している。レオ・トルストイを理解している。池大雅《いけのたいが》を理解している。武者小路実篤《むしゃのこうじさねあつ》を理解している。カアル・マルクスを理解している。しかしそれが何になるんだ？ 彼等は猛烈な恋愛を知らない。猛烈な創造の歓喜を知らない。猛烈な道徳的情熱を知らない。猛烈な、およそこの地球を莊嚴にすべき、猛烈な何物も知らずにいるんだ。そこに彼等の致命傷《ちめいしょう》もあれば、彼等の害毒も潜《ひそ》んでいると思う。害毒の一つは能動的に、他人をも通人に変らせてしまう。害毒の二つは反動的に、一層《いっそう》他人を俗にする事だ。小えんの如きはその例じゃないか？ 昔から喉《のど》の渴《かわ》いているものは、泥水《どろみず》でも飲むときまっている。小えんも若槻に囲われていなければ、浪花節語りとは出来なかったかも知れない。

「もしまた幸福になるとすれば、いや、あるいは若槻の代りに、浪花節語りを得た事だけでも、幸福は確《たしか》に幸福だろう。さっき藤井がいったじゃないか？ 我々は皆同じように、実生活の木馬に乗せられているから、時たま『幸福』にめぐり遇っても、掴《つか》まえない内にすれ違ってしまふ。もし『幸福』を掴まえる気ならば、一思《ひとおも》いに木馬を飛び下りるが好《よ》い。いわば小えんも一思いに、実生活の木馬を飛び下りたんだ。この猛烈な歓喜や苦痛は、若槻如き通人の知る所じゃない。僕は人生の価値を思うと、百の若槻には唾《つば》を吐いても、一の小えんを尊びたいんだ。

「君たちはそう思わないか？」

和田は醉眼《すいがん》を輝かせながら、声のない一座を見まわした。が、藤井はいつのまにか、円卓《テエブル》に首を垂らしたなり、気楽そうにぐっすり眠《ね》こんでいた。

[# 地から1字上げ] (大正十一年六月)

底本：「芥川龍之介全集5」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年2月24日第1刷発行

1995（平成7）年4月10日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utyama

校正：かとうかおり

1999年1月10日公開

2004年3月8日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。